

美しい死刑



講談社

美しい死刑

定価 880円

第1刷 1978年8月24日

著者 佐野 洋

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

T112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03) 945-1111 (大代表) 振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© 1978 佐野 洋

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

Printed in Japan



目次

犬による発端

いかがわしく、不潔な……

火をつけた女

殺された女

事情聴取

消えた男

新たな被害者

尾行

知人関係

記事の反響

もう一つの不正

策略

大学教授の愛人

犬による終章

デザイン
イラストレーション
村山豊夫
細川弘司

美しい死刑

犬による発端

1

最初に、一人の人物を紹介する。この小説の主人公の一人とご理解いただいて、差支えない。しかし、彼はあくまでも『主人公の一人』であり、彼だけが、主人公というわけではない。

彼の名は、竹生^{たけな}征一郎、東京都内にある私立御濃^{みね}高校の教師である。年齢は、その名前から、ある程度の想像がつくように、四十歳であった。

彼が生まれたのは、一九三七年の十月であり、その年の七月に、日中事変が始まっている。そして、その年の秋ごろから、日本国内のあちこちの駅頭で、日の丸の小旗が打ち振られ、その旗の輪の中で、カーキ色の軍服に、白だすきをかけた男たちが、緊張した表情で拳手の礼をしているという光景が、目につくようになった……。いわゆる出征兵士の歓送風景である。

このような時期に、誕生したのが、竹生征一郎であった。彼の父が、どんなつもりで、『出征』の征の字を、息

子の名前につけたのか、いまは、とくに問題ではない。あるいは、彼の父は『祝出征、××君』といったのぼりを目にし、それを非常に男らしく、また勇壮なものを受けとったのかもしれない。そして、男らしく育ってくれ、という願いをこめて、征一郎という名をつけた……。

竹生は、やがて、四十になる。現在は、まだ、満三十九歳と何ヶ月かであり、近く不惑に達するということを、それほど意識せずにその日、その日を過している。

しかし、一年早く四十歳になった同僚の話によると、その日になって、初めて、『不惑』の本当の意味を悟るということであつた。

『本当の意味とは、どういうことですか？』

と、竹生は、その同僚に質問したことがある。

『いや、そんなことは、前もって教わらない方がいい。自分が、その年になれば、いやでも、ある事実に気づくのだから……』

同僚は、そう言って笑うだけで、決して教えてくれようとはしなかった。

竹生は、ことしの春から、ゴルフを始めた。しかし、これは、彼がやがて不惑に達するという事実とは、必ずしも関係はないようであつた。

彼は、どちらかというと筋肉質のからだを持っており、まだ中年肥りの傾向も現われてはいない。勤務先の高校での集団検診以外では、検査らしいものを受けたこともな

く、中年からの健康管理に、それほど神経を使つてはいないのだった。

それにもかかわらず、彼は、なぜ、ゴルフを始めたか。彼は、その理由を、誰にも明らかにしてないが、実は、ある人から、クラブを一揃い贈られたということが、最大の動機だったと言つてよいだろう。

その人は、竹生をスポーツ用品の専門店に連れて行き、その売場主任と相談の上、最も彼に適したクラブを買つてくれたのであつた。

いや、クラブばかりではない。クラブを入れて持ち運ぶためのキャディ・バッグ、ゴルフ・シューズ、さらに、その靴や着替えなどを入れるボストンバッグまで、完全に揃えてくれたのだった。

これだけのものを揃えてもらった以上、一応は、やつてみなければ、贈り主に対しても申しわけない。彼は、そんな言いわけを、自分にして、ゴルフに手を出し始めたのであつた。

しかし、これは、あくまで、自分に言い聞かせるための弁明であり、他人には、そうは言つていない。

なぜなら、ゴルフ・クラブを、その人物から贈られたという事実自体を、彼は秘密にしたかったのである。もともととは、その人物に頼まれ、ちよつと労力をさいただけであつた。ところが、その謝礼に、高価すぎる贈物をされた……あまりにも不釣合いな謝礼なので、彼も、何とな

く、やましきを感じたのである……。

ところで、そのように、せっかく専門店の主任が選んでくれたゴルフ・クラブであるにもかかわらず、彼は、現在、ゴルフ場に行くとき、それを持つては行かないことにしている。弟の助言を受け入れたのである。

彼には、三つ違いの弟がいた。大手商社に勤め、ゴルフはすでに何年か前に始めていた。

その弟に、彼が贈られた一揃いのクラブを見せたところ、弟の順二郎は、たちどころに言つてのけた。

『はあ、誰かからもらつたものだな？』

『わかるか？』

と、竹生は驚いて聞いた。

『わかるさ。失礼だけど、高校の教師が、さあこれからゴルフを始めよう、というとき、このクラブに手を出すはずがない。自分で買うなら、もつと安いものを選ぶよ。ピギナーで、これだけのクラブを持つているとすれば、よほどの金持ちか、誰かからプレゼントされたにきまつている』そして、順二郎は、しばらくの間は、安物の古いクラブを使つていた方が、人目につかなくていい、と忠告してくれ、自分の中古セットを、彼に貸してくれたのだった。

順二郎は、商社マンだけに、そういう点にも気がつくようであつた。

クラブ・ハウスの食堂には、大きな振り子時計がかかっていた。文字盤の直径も、六十センチぐらいはあるようだった。

その大きな文字盤の上を、長針が一分割、機械的な音を立てて進んだ。

と、つぎの瞬間、その時計が、鐘の音に似た音を響かせた。

「あ、四時か……」

入口近くの革張りのソファに、ゆったりとからだを沈め、雑談をしていた四人のうちの一人が言った。

「そうか、じゃあ……」

他の一人が立ち上がり、それに釣られたように、四人が一せいにソファから立った。

四人の中に、竹生征一郎がいた。彼は、この日、御濃高校の同僚たちと、朝から、このゴルフ場に来て、一日を楽しんだのである。

ここで、御濃高校について、簡単に説明しておく。

その説明のための、最もよい言葉は、『名門校』という単語ではないだろうか。

つまり、私立の男子高校であり、毎年、いわゆる有名大学の入試に、多数の合格者を出すことで、全国的にも名が知られていた。

現在では、御濃高校の制服を着ているだけで、生徒たちは、一種畏敬の目で見られるという傾向さえあった。

この日は、平日である。平日なのに、なぜ、竹生を始め、同じ高校の教師が四人、一日中、白球を追っていることができたか。

御濃高校にも、ほかの多くの高校と同じく『研究日』という制度があった。教師たちは、一週に一度、ある特定の曜日を選んで、研究日とすることができる。そして、その研究日には、授業はなく、出勤する義務もないのであった。

教師は、単に蓄積を吐き出すばかりではなく、常に新しい知識の吸収が必要だ、という理由で、この『研究日』が設けられたのだそうだ。従って、本来は、研究日を利用して、それぞれ、専門的知識の開発、能率的教授法の考案などに励むべきなのであるが、果して、どれだけの教師が、そのような目的意識を持って、研究日を過しているか。現に、竹生は、毎週水曜日を、彼の研究日として選んでいるのだが、その日は、もっぱら『小さな白球を使用しての弾道学』と、たわむれに名づけた研究の実験に励んでいるのだった。

他の三人も、それぞれが、ゴルフ好きであった。そして、彼らも、水曜日が研究日であった。彼らが自称している研究のテーマも、竹生と大同小異である。もともと、三人のうちの一人、とくに肥満した体格の持主である、岩見研介の研究テーマは『運動量と発汗量、並びに体重の増減に関する実験』ということになっていた。

四人の研究日が、揃って水曜日なのは、偶然ではない。

互いに打合わせをし、この日なら、揃って休むことができるという見込みのもとに、別々に『研究日指定』の申請を、学校長宛に提出し、それが認められたのであった。

食堂を出た四人は、それぞれが、フロントでグリーンフィの精算を済ませた。

そのグリーンフィの額は、彼らの給料の総額にくらべ、必ずしも安いとは言えなかった。

しかし、彼らは、それを支払うとき、その支出を惜しむような表情は見せなかった。それは、四人とも、それぞれ、給料以外に収入を得る手段を持っているからである。御濃高校の教師という肩書きがあるおかげで、彼らには、副収入の機会が、いくらでもあった。

竹生征一郎は、クラブ引き渡し所から、自分のキャディ・バッグを受け取ると、それを右肩にかつぎ、左手には靴や下着類を入れたボストンバッグを持って、玄関先へ出た。

キャディ・バッグや、ボストンバッグは、人に贈られたものを、そのまま使っていた。それらも、一応は高級品ではあるが、それほど値の張るものではない、と弟が鑑定してくれたのであった。

彼は、玄関先へ出ると、そこに、手に持って来たものを置いた。

つぎに、彼がすることは、駐車場から、自動車をここに持って来ることであった。

竹生は、三年前に自動車の免許をとった。そして、月賦で日東コヨーテ一六〇〇を買ひ、以来、それをずっと使っている。このコヨーテは、ゴルフ道具と違って、贈られたものではなかったが、教え子の父親に、日東自動車販売の営業課長がいたので、市価よりは安く手に入れることができた。

自動車は、現在の彼には、大変に役立っている。もし、自動車の運転をしなかったなら、仮りに、ゴルフ・クラブを贈られたとしても、いまほど熱心に、ゴルフをやる気にならなかったのではあるまいか。

バッグを肩にかついで電車に乗る——と考えただけで、彼はうんざりしてしまう。

彼は駐車場に行つて、自分のコヨーテのドアにキイを差し込んだ。そして、それを左に回転させて、ドアを開けた。

運転席に乗り込み、エンジンをかける。コヨーテの場合、エンジン、ドアロック、そして後部トランクのすべてが、同じキイであった。ガソリンタンクのキイだけが、別になつていて、それはいく分、小さ目であった。

駐車場には、まだ、かなりの車が残っていた。日が長くなったので、一ラウンド半回る人たちも多いのであろう……。

竹生は、車を玄関先につけた。

岩見研介が、肥ったからだを重そうに動かし、キャディ・バッグを持って、竹生の車に近づいて来た。

この日は、岩見研介を、竹生の車に同乗させることになっていた。

岩見と竹生とは、自宅が二百メートルと離れていなかった。そして、岩見も車を持っている。だから、ゴルフに行く場合は、交替でどちらかの車を使う約束ができていた。

竹生のコヨーテは、運転席に坐ったまま、後部トランクのカバーを操作できる装置がついている。

運転席の右側に、小さなレバーがあり、それを上に上げると、トランクのカバーが、はね上げられるのである。

竹生は、そのトランク用レバーを、右手で引き上げた。そして、彼自身は、そのまま、運転席に坐ったままでいた。

同乗させてもらう者が、運転者の分まで、キャディ・バッグやボストンバッグを、トランクにおさめる。——竹生と岩見との間では、そのような取り決めができていたのだ。

だから、竹生は、この日も、当然、岩見がそれらのことをやってくれると考え、運転席を降りなかったのだ。

煙草を、上衣のポケットから出し、口にくわえた。ところが、彼がポケットのマッチを探っていると、誰かが、運転席左側の窓ガラスを叩いた。

岩見であった。大きな鼻の頭に、いっぱい汗の玉をつけ

ている。

彼は、興奮しているようであった。何か叫んでいるらしいが、窓が閉まっているため、竹生には、彼の声が届かない。

竹生は、からだを左側に倒し、竹生がいる方の窓を開けた。

「どうしたんだい？ まだ積み終っていないのだろう？」竹生は、うしろを振り返りながら言った。トランクのカバーが、まだはね上ったままになっているのが、リヤ・ウインドウ越しに見えた。

荷物を積み終ったら、カバーを手で押さえれば、それで自然に施錠されるしくみになっている。これまで、岩見は、何回もこの車に乗っているのだから、それらのことは、すべて知っているはずであった。

だから、竹生の言葉には、ぐずぐずしている岩見を責める響きがあった。

「いったい、どういうつもりなんだ。あんなものを載せて……」

岩見の言葉つきを聞いて、竹生は、おやと思った。彼は、いつも以上に早口であった。これは、興奮したとき

の、彼の癖である。

「あんなもの？」
と、竹生は聞いた。
「犬だよ。犬の死骸だ」

岩見は、いらだったように叫んだ。必要以上に、声も大きくなっていた。

「犬？ 犬がどうしたって？」

「いいから降りてくれよ。降りて、自分の目で見ればわかるだろう」

岩見は、それだけ言うと、窓のそばを離れ、再び、自動車のうしろの方へ回って行った。

竹生は、岩見の言葉が理解できないまま、渋々とドアを開け、運転席から、からだを外に滑らせた。

何人もの人たちが、彼の車のトランクをのぞきこんでいた。

岩見や、他の二人の仲間だけではなく、ゴルフ場の係員も、その中にはいた。

彼らは、互いに何かを言い合っていたが、竹生の耳にははいらなかった。

どうも、異常な事態が起きているらしいことだけは、その場の雰囲気であつた。

竹生は、急いで、車のうしろに回り、トランクをのぞきこんだ。

たしかに、岩見の言葉通りであつた。そこには、犬の死骸がはいっていた。

幼稚園児ぐらいはある大きな犬であつた。犬の種類は、竹生にはわからない。しかし、首輪がついているところを見ると、これはどこかの飼犬であつたのだろう……。

これは、どういうことなのか。竹生は、驚きのあまり、ぼんやりと、周囲を見回した。

2

「柿ヶ原カントリー・クラブ」の支配人から、電話がかかって来たのは、その二日後であつた。

十二時五十分、そろそろ昼休みが終ろうとしていた時刻である。

数学科教官室の電話が鳴り、たまたま近くにいた竹生が、その送受器をとつたのだつた。

「はい、数学科教官室です」
と、竹生は電話に出た。

「恐れ入ります。竹生先生はいらっしゃいますでしょうか？」

「わたしは、竹生ですが……」

竹生は、何となく、部屋の中を見回しながら答えた。教官室には、彼より若い教師が、二人いるだけであつた。

「あ、先日はどうも……。柿ヶ原カントリーの柴坂です」

「ああ……、この間は、いろいろとご面倒をかけて……」

竹生は小声で答えた。別に、若い同僚たちの耳を恐れたわけではない。ただ、余り歓迎すべき電話ではない、という意識が、彼の中にあつたのだろう。

——あの日、彼の車のトランクにあった犬の死骸について、彼とゴルフ場の係員の間に、ひと悶着があった。

竹生にしてみれば、その死骸は、全く彼とは関係のないものであった。だから、ゴルフ場側で引き取ってくれるように要求したのだが、玄関先でボーター役をしている係員は、それは困るという。

押し問答を交しているところへ、顔を出したのが、支配人の柴坂武哉であった。

柴坂は、小柄だが眼つきの鋭い男だった。

『あたくし、支配人でございますが……』

と、名刺を出されたとき、竹生は彼から一種の威圧感を受けた。年齢は五十五、六というところか、総白髪と日焼けした顔が、彼に威厳を与えていた。

だが、その鋭い目つきにもかかわらず、彼の態度は柔らかだったし、物わかりも悪くはなかった。

竹生の説明を一通り聞くと、柴坂は、すぐに言った。

『わかりました。お客様が、この犬について、全く覚えがないとおっしゃるのなら、恐らくそうなのだと思います。これは、わたしでも、責任を持って処理いたしますしう』

そして、彼は不服そうな係員に命じて、犬の死骸を外に運び出させたのだった。

だが、同時に、彼は竹生に向って、名刺を要求した。

『ご覧のように、この犬には、首輪がついており、多分飼

犬だと思えます。従って、あとで飼主が現われた場合のことも考えなければなりませんので……』

『わかりました』

竹生は名刺を出した。『これには勤務先しか書いてありませんが、もし、電話を下さるのなら、一時少し前か、四時過ぎがいいでしょう』

柴坂は、その竹生の言葉を覚えていて、この時刻に電話をよこしたのだろう——。

『実はですね』

と、柴坂の方も、何か打ち明け話をするような口調で言った。『あの犬、何でも血統書つきのコリーなんだそうですが、飼主がわかったのです』

『ははあ、よくわかりましたね』

『ええ、ご承知のように、あの犬は首輪をしておりましたね。その首輪に、鑑札がついていましたので、その鑑札番号から調べてもらったのです。目黒区に住む、三輪さんという方なんですが……』

『へえ……。目黒区ですか……』

竹生は意外に思った。別に深い根拠はないが、あの犬は、ゴルフ場の近くの家の飼犬だろう、と思っていたのだ。

目黒からだ、と、柿ヶ原カントリー・クラブまでは、車で、一時間ちょっとかかるだろう。

『それでですね。その飼主の方には、事情を説明し、先生のお名前もお知らせしたわけです。それで、ことによる

と、先生を訪ねて行くかもしれませんので、その節はよろしく……」

「なるほど……。しかし、その三輪さんというのは、どういう方です？ お宅のクラブのメンバーですか？」

「いいえ、そうじゃないんですな。それで、困ってしまつて……」

「困った？ 何がですか？ その飼主が、何かゴルフ場の方に文句でも？」

「文句というわけではありません。ただ、目黒の犬が、なぜ柿ヶ原で死んでいたのだらう、などと、しつこく聞くもので……。まあ、そんなわけで、どうか、宜しくお願いいたします」

柴坂は、そういうと、電話を切った。

柴坂が話をした飼主は、その日の夕方、御濃高校に現われた。

玄閑協の受付から、三輪という面会人が来た、と知らされた竹生は、応接室に通すように頼み、そこに急いだ。

しかし、応接室のドアを開けたとたん、彼は、声をのみ、立ちすくんだ。

彼の姿を見て、ソファから立ち上がったのが、和服姿の女性だったからだ。

一瞬、彼は部屋を間違えたかと思った。

「いや、これは……」

という言葉が、自然に、彼の口から飛び出していた。

「初めまして……」

その女性が、そう挨拶をしなければ、彼はその部屋から引き返し、受付に行つて、もう一度確かめたかもしれない……。「竹生先生でいらつしやいますか。あたくし、三輪と申します」

彼女は、あらかじめ用意していたのであろう。手に持っていた名刺を差し出した。婦人用の小型名刺で、中央には、『三輪英佐江』と名前が刷られてあった。そして、左隅には住所と電話番号がはいっていたが、職業を表わすようなものは、何も書かれていない。

「竹生です」

彼も、名刺を出し、ソファを勧めた。

「突然、お邪魔しまして……。きょう、うかがったのは、あたくしでも飼つておりましたハリーが、何ですか、先生にご迷惑をおかけしたとかで……」

三輪英佐江の口調には、多少間のびした感じがあった。もつとも、人によつては、そこに一種の甘さを感じ、魅力的に思うのかもしれないが、竹生は、こういう喋り方をする女は苦手だった。

「いや、迷惑ということはないんですがね。しかし驚きましたよ。何しろ、わたしには全く覚えのないことなんで……」

竹生は、わざと早口に言った。

「はあ……。あたくしどもも、それは同じでございます。朝から、ハリーの姿が見えず、もしや野犬狩りにでもつまつたのではないか、と保健所に連絡したり、近所の方にお願ひして、手分けして探したり、大騒ぎをしていたところ、夕方になつて、あのゴルフ・クラブから連絡をいただきまして……。最初はとても信じられなかつたんです。柿ヶ原と言えば、うちから、ずいぶん離れておりますし、ハリーが、ひとりで、そんなところに行くはずありませんでしょう？」

「はあ……」

竹生は、しかたなしに、うなずいた。

三輪美佐江は、三十五前後というところか？ 竹生には、着物のことはよくわからないが、彼女が、和服を着なれているらしいという印象は持った。首が細い上、撫で肩のため、なよなよとした感じを受ける。

「それで、タクシーを飛ばして、あのゴルフ・クラブへ行つたんですが、やつぱり、死体はハリーのものではした」

三輪美佐江は、話しながら、膝の上でハンカチーフをもてあそんでいた。しかし、そのハンカチーフで目を押さえるというようなことはなかった。それが、竹生には救ひであつた。もし、泣き出されでもしたら、慰めるのに困つたろう……。

「ええと、ずっと目黒にお住まいですか？」

と、竹生は聞いた。

「はい、もう十年以上になります」

「犬をお飼ひになつたのは、目黒にお住みになつてからでしょうか？」

「ええ、あのハリーは、四年前、生まれてすぐ、知人からわけてもらったもので……」

「そのお知り合ひの方というのは、どこにお住まいでしたか？」

「板橋です」

「すると、柿ヶ原とは全く関係がないわけですね？」

「そうなんです。先生、本当のことをおっしゃつて下さい。ハリーは、先生に、何かご迷惑をかけたのでしょうか？」

三輪美佐江は、恨むような目つきで、竹生の顔を見た。

「え？ いや別に……」

竹生は首を振つた。

しかし、彼は、ひそかに考えていた。強いて言えば、こうやつて、あなたの相手をしていなければならぬのも、ハリーが招いた迷惑の一つだ……。

「いいんですのよ。ふだんは、おとなしい犬なんです、けどもが、からかつたりすると、とても怒りまして……。ですから、もし、そういうことで、先生に吠えかかり、そのために、先生が身の危険を感じて、ハリーをお殺しになつたのなら、あたくしとしては、何も申し上げる筋合ひは

ないと思いますし……」

「待って下さい」

竹生は、あわてて、手を振った。「お殺しつて、つまり、お宅の犬を、わたしが殺したという風にお考えなのですか？」

「違うんですの？」

三輪英佐江は、じつと竹生の目に見入った。

「じょうだんじゃありません」

竹生は、ことさらに強い口調で言った。

「わたしが殺した、というようなことを、ゴルフ場の支配人が言ったのですか？」

「いいえ、そうはおっしゃりません。でも、妙ですねえ、と首をひねるだけで……。それで、直接、先生にお聞きした方がいいと言っておきましたの。ですから……」

「じゃあ、とにかくご説明します。わたし自身、なぜ、わたしの車に、お宅のハリーの死体がいっていたか、よくわからないことなんです。いいですか？」

竹生は、二日前の経験を、順を追って説明した。

「あのう……。あたくし、自動車のことはよくわかりませんけれど……」

聞き終ったとき、三輪英佐江は、遠慮勝ちな口調で聞いた。「自動車のトランクですか？ そのところは、外か

らでも、簡単に開くものですか？」

「いいえ、鍵がなければ開けられません」

「そうでしょうねえ……。そうじゃなかったら、安心して、駐車場に置いておくわけにもいきませんものねえ……。でも、それだと、ますますおかしくなりますわ。先生は、ゴルフをなさっている最中、車の鍵はどこにお置きでしたの？」

「上衣のポケットに入れて、その上衣はロッカーに預けておきました」

「それじゃあ、誰もトランクを開けられないわけですね？」

「まあ、そうなんですよ……。ただ、わたしの車は、日東コヨーテなのですが、その車種の場合は、運転席の横についているレバーを引つぱると、トランク・カバーが開くのですがね」

「でも、普通、ドライバーの方って、車を駐車場に置いたときは、ドアにも鍵をかけるのではないかしら？」

「ええ……。ですが、ことによると、あの日、わたしは、ドアロックを忘れて、車を離れたかもしれないです」

それは、あの日の帰途、同乗した岩見と話し合った末の結論であった。そうでも考えない限り、トランクの中に、犬の死体がいりこむことは、物理的に不可能だった。もっとも、その結論には、竹生自身は不満であった。

彼は、あの日の朝、意識して、ドアに鍵をかけた記憶があったのだ。